

【表現学関連分野の研究動向】

文章・談話研究(1)—4つの視点から—

野村 眞木夫

2013年から2015年にかけての文章・談話研究で、表現研究の観点から重要だと判断される動向として4点を取り上げる。

①接続詞を中核とした文章研究があり、文法論との境界において文脈を重視する観点から展開されている。長谷部亜子2014「接続詞コノウエ/ソノウエの選択要因とその優先順」『日本語文法』14(1)はBCCWJを用いて両語を調査し、コ/ソの部分が承ける前文脈およびコノウエ/ソノウエ以後の後文脈の事態がそれぞれ既然か未然かがそれらを使い分ける際に優先され、自由間接話法にかかる話者の視点の介入が第二の要因であることを論証する。鯨井綾希2015「同一名詞のくり返しが生じる文章展開—接続表現を指標とした分析—」『文化』78(3・4)もBCCWJを用い、接続表現により形成された文脈で、同一名詞のくり返しの量がそれ以前に比べて変化する様相を明らかにし、文章展開における同一名詞のくり返しかたとそこに用いられる接続表現の類型との対応関係を整理する。

②大学講義の理解に関する研究では、談話構成、特に話段の構造を前提とした研究が目についた。研究代表者佐久間まゆみ2015『大学学部留学生による講義理解の表現類型に関する研究』掲載の宮田公治「3種の講義A,G,Hにおける「話段の切れ目」「重要情報を含む文」の頻用文型」、伊能裕晃「講義の「話段」の構造とフィラーの出現傾向」はそれぞれ話段との関連で分析し、また石黒圭2015「大学

講義の文末表現の機能—引用助詞「と」で終わる文を例に—」『一橋大学国際教育センター紀要』6は、標記の類型について引用表示・構造表示・文脈補填・談話境界の4つの機能をあげる。

③談話における発話と身振りや視線との関連に着目したマルチモダリティの研究が行われている。城綾夫・平本毅2015「認識可能な身振りの準備と身振りの同期」『社会言語科学』17(2)は、参加者の認識可能な身振りの準備段階を仮定し、その構えが他の参加者に利用され、発話の展開との関連などを資源として、両者の間に身振りの同期が起こると想定する。

④医療・福祉関係者と患者・利用者間の談話を中核とした研究が一つの流れを作っている。方言学との境界に位置する仕事だが、友定賢治2014「「臨床方言学」の確立に向けて」『人間と科学』14(1)は、この動向を概観している。震災のつらさ寂しさを語るという局面は表現の一般的な領域に帰属する。さらに、今村かほる2015「医療・福祉と方言—応用方言学として—」『方言の研究』1は、表現方法とコミュニケーションに触れ、何を話すのか、患者は質問できるか、応答に肯定形・否定形のどちらを用いるかを問い、オノマトペの表現にも言及する。

以上のように、文章・談話の領域では、文法論に立脚した精緻な記述研究が着実に展開される一方で、避けがたい現実を表現の側面からどのように理解し対応することができるのかが問われている。表現は複数の要因が統合された具体相であり、その多重性や複合性の様相を理解することが求められ、また推し進められているのである。(上越教育大学)